

論点・視点 No.6

論点

「日本の伝統建築にみる究極の自由空間」

2014.3.3 本田広昭

視点

- ◎…伝統的建築は構造（スケルトン）と内装（インフィル）の分離が実現されていた
- ◎…空間（内装）の変化対応力は「道具」に委ねる究極の自由な空間
- ◎…木の床がもたらす自由度と環境親和性

日本の伝統的な木造建築にスケルトンとインフィルの分離が実現されていたようだ。構造（スケルトン）は、床と柱と屋根で出来ていて残りは道具（インフィル）で暮らす。外皮は雨戸や障子、間仕切りは襖や屏風、暖簾など、垣根もそうだが、おおよそ外敵から身を守る西洋式とは決定的な違いがみられる。床材の畳もモジュールの極みといわれている。話はそれるが、火災が頻発する江戸時代の貸家には、畳やかまどなどが付いていなかった。理由は、大家の初期投資額に対する、火災の喪失確率と回収期間のマネジメントだったという説だ。

話を元に戻そう。西洋のインフィルは内装という意味合いが強く、目的の用途に合わせたデザインがその空間価値の最大化をもたらすという文化だ。ニッポン式の移動や取り外し、交換を前提とした道具をインフィルに見立てると、空間の変化対応力は飛躍的に高まることになる。心地よさなどのデザイン性や季節感もできるだけ道具に委ねるとい、究極の多目的空間といえるのではないか。

変化のスピードがますます速まるであろうオフィス空間の未来に向けて、DNAとして私たちに染み込んでいるこのような空間活用術を利用しない手はない。そこで考え着的のがあの学校の体育館風オフィスだ。ピカピカに磨き抜かれたフローリングの床材はそのままの利用も可能だが、床置きの子機や畳まで多様なデザインにも対応できる。木の無垢材床は経年で削り直すと新品にもなる。二酸化炭素を吸収して育った木材と、CO₂をまき散らして製造されたカーペットの違いは雲泥の差である。あのスタバのように、天井は仕上がっていない方が何かと多様な空間づくりができるかもしれない。非常照明以外の照明器具は、道具として持ち込む方式が良いかもしれない。

近未来、こんな究極のオフィス空間を試みるビルオーナーに期待したい。